

第1章 幼児教育の基本

1. 生涯にわたる人格形成の基礎を培う幼児教育

教育は、こどもの望ましい発達を期待し、こどものもつ様々な可能性に働き掛け、その人格の形成を図る営みです。幼児一人一人のもつ様々な可能性は、日々の生活の中で出会う環境によって開かれ、幼児一人一人が自らの興味や関心、能力に応じて環境に関わり、それに応じて環境からの応答を受け取るといった相互作用を繰り返すことで具現化されていきます。幼児は、環境と関わり、体験を深め、そのことが幼児の心を揺り動かし、次の活動を引き起こしていくのです。そうした体験の重なりが幾筋も生まれ、幼児の将来へとつながっていきます。

(1) 育みたい資質・能力と「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」

社会に出てからも学校等で学んだことを生かせるよう、幼稚園等から高等学校までを通して、「知識及び技能」、「思考力、判断力、表現力等」、「学びに向かう力、人間性等」をバランスよく育てていきます。園においても、幼児期の発達の特性を踏まえ、育みたい資質・能力である「知識及び技能の基礎」、「思考力、判断力、表現力等の基礎」、「学びに向かう力、人間性等」を育てていきます。

資質・能力が育まれている幼児の園修了時の具体的な姿が「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」であり、これらの資質・能力は、幼稚園教育要領等の第2章に示すねらい及び内容に基づく活動全体を通して育まれていきます。「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」は到達目標ではなく、幼児の自発的な活動としての遊びを通して、資質・能力が幼児一人一人の発達の特性に応じて育っていく中で、幼児の姿として現れていくものであり、全ての幼児に同じように見られるものではありません。また、「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」は、特に5歳児後半に見られるようになる姿ですが、3歳児、4歳児の時期から、幼児が発達していく方向を意識して、それぞれの時期にふさわしい指導を積み重ねていくことに留意した結果として見られる姿です。

(参考) 育みたい資質・能力及び「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」

【育みたい資質・能力】

- (1) 豊かな体験を通じて、感じたり、気付いたり、分かったり、できるようになったりする「知識及び技能の基礎」
- (2) 気付いたことや、できるようになったことなどを使い、考えたり、試したり、工夫したり、表現したりする「思考力、判断力、表現力等の基礎」
- (3) 心情、意欲、態度が育つ中で、よりよい生活を営もうとする「学びに向かう力、人間性等」

【幼児期の終わりまでに育ってほしい姿】

- (1) 健康な心と体
園生活の中で、充実感をもって自分のやりたいことに向かって心と体を十分に働かせ、見通しをもって行動し、自ら健康で安全な生活をつくり出すようになる。
- (2) 自立心
身近な環境に主体的に関わり様々な活動を楽しむ中で、しなければならないことを自覚し、自分の力で行うために考えたり、工夫したりしながら、諦めずにやり遂げることで達成感を味わい、自信をもって行動するようになる。
- (3) 協同性
友達と関わる中で、互いの思いや考えなどを共有し、共通の目的の実現に向けて、考えたり、工夫したり、協力したりし、充実感をもってやり遂げるようになる。
- (4) 道徳性・規範意識の芽生え
友達と様々な体験を重ねる中で、してよいことや悪いことが分かり、自分の行動を振り返ったり、友達の気持ちに共感したりし、相手の立場に立って行動するようになる。また、きまりを守る必要性が分かり、自分の気持ちを調整し、友達と折り合いを付けながら、きまりをつくったり、守ったりするようになる。
- (5) 社会生活との関わり
家族を大切にしようとする気持ちをもつとともに、地域の身近な人と触れ合う中で、人との様々な関わり方に気付き、相手の気持ちを考えて関わり、自分が役に立つ喜びを感じ、地域に親しみをもつようになる。また、園内外の様々な環境に関わる中で、遊びや生活に必要な情報を取り入れ、情報に基づき判断したり、情報を伝え合ったり、活用したりするなど、情報を役立てながら活動するようになるとともに、公共の施設を大切に利用するなどして、社会とのつながりなどを意識するようになる。
- (6) 思考力の芽生え
身近な事象に積極的に関わる中で、物の性質や仕組みなどを感じ取ったり、気付いたりし、考えたり、予想したり、工夫したりするなど、多様な関わりを楽しむようになる。また、友達の様々な考えに触れる中で、自分と異なる考えがあることに気付き、自ら判断したり、考え直したりするなど、新しい考えを生み出す喜びを味わいながら、自分の考えをよりよいものにするようになる。
- (7) 自然との関わり・生命尊重
自然に触れて感動する体験を通して、自然の変化などを感じ取り、好奇心や探究心をもって考え言葉などで表現しながら、身近な事象への関心が高まるとともに、自然への愛情や畏敬の念をもつようになる。また、身近な動植物に心を動かされる中で、生命の不思議さや尊さに気付き、身近な動植物への接し方を考え、命あるものとしていたわり、大切にすることを覚えるようになる。
- (8) 数量や図形、標識や文字などへの関心・感覚
遊びや生活の中で、数量や図形、標識や文字などに親しむ体験を重ねたり、標識や文字の役割に気付いたりし、自らの必要感に基づきこれらを活用し、興味や関心、感覚をもつようになる。
- (9) 言葉による伝え合い
先生や友達と心を通わせる中で、絵本や物語などに親しみながら、豊かな言葉や表現を身に付け、経験したことや考えたことなどを言葉で伝えたり、相手の話を注意して聞いたりし、言葉による伝え合いを楽しむようになる。
- (10) 豊かな感性と表現
心を動かす出来事などに触れ感性を働かせる中で、様々な素材の特徴や表現の仕方などに気付き、感じたことや考えたことを自分で表現したり、友達同士で表現する過程を楽しんだりし、表現する喜びを味わい、意欲をもつようになる。

2. 幼児期の特性と幼児教育

(1) 幼児期の特性

幼児期には、幼児は家庭において親しい人間関係を軸にして営まれていた生活からより広い世界に目を向け始め、生活の場、他者との関係、興味や関心などが急激に広がり、依存から自立に向かいます。多くの幼児にとって園生活は、家庭から離れて同年代の幼児と日々一緒に過ごす初めての集団生活です。家庭や地域での生活において幼児が安心して依存できる保護者や身近な大人の存在が必要であるのと同様に、園生活が幼児にとって安心して過ごすことができる生活の場となるためには、幼児の行動を温かく見守り、必要な支援を行う先生の存在が不可欠です。

そして、幼児は、先生との信頼関係を基盤に、何人かの他の幼児と一緒に活動し、生活がより豊かに楽しく展開できることを体験し、他の幼児が共にいることの楽しさと大切さに気付いていきます。それと同時に、自己主張のぶつかり合いなどによる怒り、悲しさ、寂しさなどを味わう体験を積み重ねることによって、次第に、相手も自分も互いに違う主張や感情をもった存在であることにも気づき、その相手も一緒に楽しく遊んだり生活したりできるよう、自分の気持ちを調整していくようにもなります。

さらに、生活の場の広がりや対人関係の広がりによって、幼児の興味や関心は生活の中で様々な対象に向けられて広がっていきます。

(2) 幼児期の発達

人は生まれながらにして、自然に成長していく力と共に、周囲の環境に対して自分から能動的に働き掛けようとする力をもっています。自然な心身の成長に伴い、人がこのように能動性を発揮して環境と関わり合う中で、生活に必要な能力や態度などを獲得していく過程を発達と考えることができます。幼児期は、遊びを中心とした生活の中で、幼児自身が自らの生活と関連付けながら、好奇心を抱くこと、あるいは必要感をもつことが重要です。

幼児の心身の諸側面は、それぞれが独立して発達するものではなく、幼児が他の幼

児と体を動かして遊びを展開するなどの中で、それぞれの側面が相互に関連し合うことにより、発達が進められていきます。また、幼児の発達は連続的ではあるものの常に滑らかに進行するものではなく、ときには、同じ状態が続いて停滞しているように見えたり、あるときには、飛躍的に進んだりすることも見られます。さらに、このような発達の過程は、ある時期には身に付けやすいが、その時期を逃すと、身に付けにくくなることもあります。したがって、どの時期に何をどのような方法で身に付けていくかという適時性を考えることは、幼児の望ましい発達を促す上で大切です。なお、ここでの適時性とは、長期的な見通しに立った緩やかなものを指しているものであり、人間は生涯を通して発達し続ける存在であることから、その時期を過ぎたら、発達の可能性がないというような狭い意味のものではありません。

(3) 幼児教育の基本と重視する事項

幼児教育は、環境を通して行う教育を基本とし、「幼児期にふさわしい生活の展開」、「遊びを通しての総合的な指導」、「一人一人の発達の特性に応じた指導」に留意し、幼児一人一人が発達に必要な体験を得られるようにしています。

①環境を通して行う教育

幼児期の教育においては、幼児が生活を通して身近なあらゆる環境からの刺激を受け止め、自分から興味をもって環境に主体的に関わりながら、様々な活動を展開し、充実感や満足感を味わうという体験を重ねていくことが重要です。そのためには、幼児が安心して周囲の環境に関わるような雰囲気が必要です。その上で、幼児の中に興味や関心がわいてきて、関わらずにはいられないように、そして、自ら次々と活動を展開していくことができるように、配慮され、構成された環境が必要です。つまり、幼児が環境に関わることにより、その発達に必要な経験をし、望ましい発達を実現していくようになることが必要です。ただ単に幼児が好き勝手に遊んでいるだけでは、必ずしも発達にとって重要な価値ある体験ができるとは限りません。先生は、一人一人の幼児の中に今何を育みたいのか、一人一人の幼児がどのような体験を必要としているのかを明確にし、幼児がどのような活動の中でどのような体験をしているのかを考慮しながら、先生としての願いを環境の中に盛り込んでいきます。

環境を考えるに当たっては、遊具や用具、素材などの物的環境に加え、その場にいる他の幼児や先生、そのときの自然事象や社会事象、空間的条件や時間的条件、さらには、その場の雰囲気なども幼児の主体的活動や体験の質に影響を与えていることを踏まえなくてはなりません。

②幼児期にふさわしい生活の展開

幼児は、先生との信頼関係の下、必要なときに先生から必要な支援を受けながら、自分の力でいろいろな活動に取り組む体験を積み重ねていきます。幼児は、興味や関心から発した直接的で具体的な体験を積み重ね、自分の生きる世界や環境について多くのことを学び、様々な力を獲得していきます。また、幼児期は社会性が著しく発達していく時期であり、他の幼児との関わりの中で、幼児は相互に刺激し合い、様々なものや事柄に対する興味や関心を深め、それらに関わる意欲を高めていきます。したがって、園生活では、幼児が他の幼児と十分に関わって展開する生活も大切にすることが重要です。

③遊びを通しての総合的な指導

幼児の遊びには幼児の成長や発達にとって重要な体験が多く含まれています。遊びにおいて、幼児が周囲の環境に思うがままに多様な仕方に関わるということは、幼児が周囲の環境に様々な意味を発見し、様々な関わり方を発見するということです。遊びを展開する過程においては、幼児は心身全体を働かせて活動するので、心身の様々な側面の発達にとって必要な経験が相互に関連し合い積み重ねられていきます。一つの遊びを展開する中で、幼児たちはいろいろな経験をし、様々な能力や態度を身に付けます。したがって、具体的な指導の場面では、遊びの中で幼児が発達していく姿を様々な側面から総合的に捉え、発達にとって必要な経験が得られるような状況をつくることが大切です。

④一人一人の発達の特性に応じた指導

幼児の発達の姿は、大筋で見れば、どの幼児も共通した過程をたどると考えられます。しかし、それぞれ独自の存在としての幼児一人一人に目を向けると、その発達の姿は必ずしも一様ではありません。幼児のしようとしている行動が、多くの幼児が示

す発達の様から見ると好ましくないと思えることもあります。しかし、その行動を通して実現しようとしていることがその幼児の発達にとって重要である場合がしばしばあります。先生は幼児一人一人の発達の特性と発達の課題を把握し、その幼児らしさを損なわないように指導することが大切です。

幼児は、自分の要求を満たしてくれる先生に親しみや自分に対する愛情を感じて信頼を寄せます。しかし、幼児一人一人に応じるといふとき、ただ単にそれぞれの要求に応えればよいというわけではありません。先生の応答は、育みたい資質・能力を育むために、幼児一人一人の何に応じればよいのか考えたものでなければなりません。そのためには、先生が、幼児の具体的な要求や行動の背後に、意欲や意志の強さの程度、心情の状態（明るい気分、不満に満ちた状態、気落ちした気分など）など幼児の内面の動きを察知することが大切です。そして、その幼児がそれらの要求や行動を通して本当に求めていることは何かを推し量り、その幼児の発達にとってどのような経験が必要かをそれぞれの場面で可能な範囲で把握していることが大切です。このことは、幼児一人一人をかけがえのない存在として見て、それぞれ独自の生き方（行動の仕方、表現の仕方など）をしていると考え、その独自性を大切にすることです。そして、集団の生活の中で、幼児たちが互いに影響し合うことを通して、一人一人の発達が促されていきます。それゆえ、先生には、一人一人の発達の特性を生かした集団をつくり出すことを常に考えることが望まれています。